

ダイカスト

国内生産は、平成 15 年において生産量・額ともに過去最高を記録した。ただし、同業界におけるアジア諸国への生産拠点のシフトは続いており、「高品質、短納期、小ロット等、『難しい』ものだけが国内で残った結果」であり、受注の減少懸念、品質・納期、価格引き下げに対する得意先からの要請に今後的確に応えることができるかという懸念から、見通しについては、むしろ「厳しい」とする声が多い。

業界の概要 ダイカストとは溶融した非鉄合金を機械（ダイカストマシン）で金型に加圧注入する鑄造法であり、その製品もダイカストと呼ばれる。他の鑄造方法と比較して、大量生産が容易なうえ、複雑な形状や薄肉の製品であっても高い強度と精度、美しい鑄肌が得られるなどの特長がある。

ダイカストで使用される合金にはアルミ、亜鉛、マグネシウム等があるが、平成 14 年にはアルミダイカストが全体の 95.1%を占めており、その他亜鉛ダイカストが 4.0%である（重量ベース、経済産業省『鉄鋼・非鉄金属・金属製品統計年報』）。

製品の用途としては、自動車用が最も多く、14 年には 78.3%を占め（重量ベース）、次いで一般機械用 6.1%、自動二輪車用 5.7%、電気機械用 3.6%となっている。

大阪の地位 平成 13 年における大阪府のダイカスト製造業の事業所数は 69（従業員 4 名以上の事業所）で、全国シェアは 6.6%である。しかし、製造品出荷額等は 233 億円で、全国シェアは 3.6%にとどまっている（大阪府統計課『大阪の工業』、経済産業省『工業統計表（産業編）』）。

大阪の特徴として、自動車以外の用途向けに幅広く製品を納入している企業が多いことがあげられる。

平成 15 年は過去最高の生産 生産は、業界全体としては後掲表のように、前年に引き続き増加基調にある。平成 15 年においては主として自動車向けの出荷が伸びたことによって、生産量・額ともに過去最高を記録した。ただし、同業界におけるアジア諸国への生産拠点のシフトは続いており、「高度な品質を求められるもの、納期の短いもの、試作品等、少量のもの等、いわゆる難しいものだけ」しか国内に残っていないとのことである。

一方で、得意先からの値引きに対する要求は以前にも増して厳しく、その結果、1 トン当たり金額は従前からの低下傾向には歯止めがかかったものの、9 年に比べ 7%程度下落したまま、横ばいの推移にとどまっている。

このように生産量・額ともに過去最高は記録したものの、業界全体が回復基調にあるというわけではなく、高品質、短納期の厳しい条件に対応できる企業以外は、依然厳しい状況が続いているという認識が業界内では支配的である。

生産管理・品質管理のレベル向上が重要 最終完成品を生産する大手メーカーのアジアへの生産シフトが進んでいる。こうしたなか、国内メーカーは生産のグローバル化に対応できる技術力の保持と、多品種小ロット化、短納期化への対応力を高めるべく生産管理能力の強化が重要となっている。また、品質面においても、薄肉化や軽量化、複雑化、高精度要求への対応力向上が求められている。

その一方で環境への配慮がより求められている。ISO14000 の認証を持つメーカーに部品発注を限定しようとする動きが大手完成品メーカーの一部にある他、最近特に、得意先からの

素材に関する環境面における調査や問い合わせが増加しているとのことである。

収益性確保に向けて 納入単価の引き下げ要請に加え、小ロット化や短納期化によるコストの上昇、さらには昨年来からの原材料価格の 5～15%程度の上昇により業界各社とも収益の確保に苦慮している。従前から取り組んできた省力化、合理化の推進はもとより、鑄造後の機械加工、塗装や表面処理等の二次加工への注力、多能工の育成等、様々な取り組みが業界各社で行われている。

一部に設備投資の動きも 総じて更新投資にとどめている企業が多いものの、最近になって、一部の企業で大規模な設備投資を行う等、動きが見られるようになった。ある企業では、これまで外注していた後処理を内製化し、トータルで受注できる体制の整備をすすめている。

人材の育成・確保 求められる技術力や品質を一定以上に保つためには、これ以上の人員削減は不可能であるとの認識が背景にあり、概ね雇用は維持されているようであるが、多くの企業では従業員の採用は退職者の補充をする程度にとどめている。また、正社員から契約社員に切り替える等して雇用の形態を変化させながら総従業員数を一定に保っている企業もある。

IT化への対応、高度な加工技術やノウハウの蓄積、生産管理等、業界各社が対応しなければならぬ課題は多い。そのため、これまでも増して従業員の確保・育成が不可欠となっており、一部で多能工の育成に注力する企業も見られた。しかし、育成には長期間を要することから、定年を迎えた有能な従業員を「即戦力」として再雇用している企業も見られ、人材の確保・育成に関する業界各社の対応は様々であった。

今後の見通し 一部に回復の兆しがみられる同業界であるが、今後の見通しを楽観視する意見は少数である。アジア諸国への生産拠点のシフトの影響から、受注の減少懸念があり、ますます厳しさを増す得意先からの品質・納期に関する要求、そして価格の引き下げ要請に的確に応えることができるかという懸念から、むしろ今後を不安視する声が多い。「現状のままでは生き残ることができない」というのが業界から聞こえてくる共通の声であった。

(田中 宏)

ダイカストの生産推移（全国）

	重量（トン）		金額（百万円）		1トン当たり 金額（千円） （B/A）
	（A）	前年 同期比 （%）	（B）	前年 同期比 （%）	
平成8年	755,716	0.9	451,802	-6.8	598
9年	801,164	6.0	480,396	6.3	600
10年	738,034	-7.9	437,841	-8.9	593
11年	761,543	3.2	437,821	0.0	575
12年	833,223	9.4	465,456	6.3	559
13年	788,711	-5.3	433,684	-6.8	550
14年	854,426	8.3	464,934	7.2	544
15年	894,046	4.6	496,346	6.8	555
15年1～3月	226,494	11.9	124,734	14.1	551
4～6月	214,655	3.5	118,901	5.6	554
7～9月	215,337	0.9	120,763	2.9	561
10～12月	237,561	2.8	131,948	5.1	555
16年1月	75,350	4.3	42,408	6.7	563

資料：経済産業省『鉄鋼・非鉄金属・金属製品統計年報』、『鉄鋼・非鉄金属・金属製品統計月報』

（注）常用従業者30名以上の事業所